# 孔雀明王像に就いて

渡邊一

孔雀明王像は遺存するもの尠く、有れば必ず名品たるに値するとは屢〻云はれた言葉である。而も之等は啻に名品たるのみでなく、それぞれに特色を有し、それぞれに問題とすべき多くの作例を殘してゐる。從つて之に關する從來の論考、解說も亦尠くなく、その明かにされるべき限りは概ね明し盡されたかの觀さへある。而も茲に就中有名な仁和寺の一本の圖版が揭げられるに當つて、なほ繁を厭はずこの大體を一瞥し、且つその問題の在る所を明かにして置き度いと思ふ。固よりその多くは門外の容易に窺ふべからざる密宗の儀軌に關はるもので、不學な私の到底及び得ない所ではあるが、意の存する所は偏に之が疑問の聲を大にして江湖の垂敎を仰がんとするに在るのみである。茲に切に大方の宥恕を乞ひ度い。

## 一

由來孔雀明王像に關する本說は義淨所譯佛說大孔雀呪王經三卷、不空所譯佛母大孔雀明王經三卷、竝に同譯佛說大孔雀明王畫像壇場儀軌一卷を主とするが、衆經目錄には早くも東晉の帛尸梨蜜多羅所譯孔雀王呪經二本を傳へ、現行の大藏にも姚秦の羅什所譯孔雀王呪經一卷、梁の僧伽婆羅所譯の同名の經二卷を始め、梵本の儘をも早くから傳へて夙にその名を支那に知られてゐた。而も茲に何人も思ひ浮べるのは唐宋間の畫人の蹟にこの孔雀明王像を聞くことの甚だ多い事である。卽ち宣和畫譜に依れば御府の藏に吳道子に四、閻立本、翟琰、盧楞伽、姚思元（孔雀佛鉢圖とあり）、杜齯龜、曹仲元に各一の本明王像があり、宋中興館閣の錄には王維に一、未詳三（うち一は學吳道子、一は學李公麟といふ）があり、また益州名畫錄には興善院に張南本の孔雀王變の在つた事を傳へてゐる。この數は當時の錄中に見る純密部の佛像のうちの最も多い一例であつて、以てこの像の流行を知ると共に、それが一般の佛畫中にやゝ特殊な位置に在つたことが想像される。從つて若し之等の像容手法を明かにする事を得れば延いては唐代佛畫の一般に寄與するところは大なるべきであるが、憾むらくは之等が果して如何

なるものであつたかを、畫史に求めることは難く、偶〻畫鑑が翟琰を評して「師吳生筆法大不及惟傳色之法嘗見孔雀明王像甚佳」と云ふのをその傳彩に關する記載として聞くが如きに過ぎない。

今日この明王の像容を徵すべき最古の遺例を擧げんとすれば恐らく胎藏蘇悉地院に在る孔雀王母菩薩がそれであらう。この尊は二臂にして左手に蓮莖を持し、右に孔雀尾を執つて蓮華座上に在る（子島本は右手の持物を異にす）。而して由來この像の所說は以上の如く晉譯に始まるが明らかにその像軌を說くのは義淨、不空以後の譯經であつて、義淨の大孔雀呪王經の壇場畫像法式は

次明畫像法（中略）執作佛像、應作金色、著桃華色袈裟、坐金色師子座、左邊畫摩訶摩瑜利天神、赤白色著白色裙帔白綖絡髆、身有四臂諸莊嚴具皆以金作、於蓮華上立或於金座上立、右邊一手持柚子、一手執蓮華、左邊一手持吉祥果（大如菰蔞黃赤、色此方所無）、一手執孔雀尾三莖、佛菩薩中間畫金色孔雀王像、於寶裝蓮華上立胭前以牛黃畫作萬字、於佛邊畫聖者阿難陀跏跪合掌（以下略）

と云ふ。之に據れば金身にして師子座に在る佛を中心としてその左邊に四臂の孔雀天神があつて蓮座又は金座上に立ち、この二尊の中間に胸（胭は明本胸）前に卍字ある金色の孔雀王の蓮華上に在るがあり、なほ之に佛を繞つて阿難以下の諸尊を列ねた一曼荼羅が得られる。次いで不空の畫像壇場儀軌は

於內院中心畫八葉蓮華、於蓮華胎上畫佛母大孔雀明王菩薩、頭向東方白色、著白繒輕衣、頭冠瓔珞耳璫臂釧種種莊嚴、乘金色孔雀王、結跏趺坐白蓮華上、或青綠花上、住慈悲相有四臂、右邊第一手執開敷蓮華、第二手持俱緣果（其果狀相似水菰）左邊第一手當心掌持吉祥果（如桃李形）第二手執三五莖孔雀尾、從佛母右邊右旋、周匝蓮華葉上、畫七佛世尊（以下略）

と說く。卽ち蓮華胎上に四臂の孔雀明王があつて金色の孔雀上に趺坐し、之を繞る蓮葉上に七佛、なほその四周に四辟支佛、四大聲聞を置いて之を以て內院となし、更に八方天、二十八大藥叉將、十二宮神等を以て第二、第三院を建立する曼荼羅である。而して吾々は實にこの經の所說によつて始めてこの明王の孔雀に乘御することを知るのである。

いま吾々は孔雀明王と云へば直ちに孔雀上に在る尊像として思ひ浮べる。併し玆に以上の事情、卽ち、最も早くこの明王の軌を說く義淨の譯經が未だ孔雀に乘御することを云はず、また前記胎曼中の此の尊が同じく蓮座上のみに在るのを見れば、或はこの形がより古いのではないかと考へる。唯惜しむべきはこの胎曼中の尊形が未だ何に據るかを、また何れの時にこの胎曼中に加へられたかを知り得ないことである。

而も姑く之を措いて玆にかの唐代の畫人が屢〻この像に筆を染めた事實を省るときは、その原因は一には本明王の廣く尊ばれた爲であつたにしても、一にはその孔雀に乘御する形が就中彼等の興趣を唆つた爲ではないかと想像される。蓋しこの鳥の美しさとまたその甚だ珍奇な事とは何れの時にも畫人の感興を惹くに足るものであるに相違ない。若し猥に想像を進めれば嚮の畫鑑の翟琰の本明王像の傳彩の評も主としてその孔雀の姿に在つたのではないかとさへ思はれるではないか。

玆に我國の造像を見るに早くも西大寺資財帳に「孔雀明王菩薩

像二軀各高□尺」の名を見出す。唯之また古密の一像にして而も全く氓び去つてゐる。いま我國に胎藏の一圖に亞ぐ古例を擧げんとすれば、法隆寺の一本に迄下るの外はない。而してこの尊こそは正しく不空軌に據る乘御孔雀の像である。

法隆寺所藏の孔雀明王像

は今日に在る孔雀明王像中の最優品の一たるのみならず我國の佛畫中にも實に甚だ稀有な一作である。洵に曾て云はれた如くこの像ほどに人を激しい疑惑を陷れる佛畫は殆んど類例がない法隆寺大鏡解說參看。その像容はかの壇場儀軌に依ること後の孔雀明王像と同樣であるに關らず、趣く所は全く相違し、凡ての佛畫中に獨自な一境を拓いてゐる。いま之を繰返すまでもないが、例へば四隅に寶瓶を置く曼荼羅風の獨尊像にしてかく斜面向なること、またその相貌の一種の憂色を帶びた表情と甚だ特異な廓輪、または長い爪ある指、其他垂髮の形、裳先の波、寶裝、文樣の制、說明的な强い暈染の用法、さては腰强くして秀高な用線等、數へ來れば一として我國の佛畫の尋常の規矩に合するものはないと云ふも過當ではない。而も渾然たる一種の寫實味の之を包む所は或は明華に乏しい憾はあつても醇熟した畫趣に斬然として頭角を抽んずるものである。この形相、手法の來由こそ最も興味ある問題に相違ない。茲に之を大陸の圖本に置くことは固より論がないとしても、なほその甚だ他の佛畫と異る所以をこの明王がかの唐代の一般の畫人の筆に上つた事實に關係を求めて見ることも强ち無駄ではないかも知れぬ。

孔雀明王

奈良法隆寺藏

然しこの場合に最も訝しさを感せしめるのは本圖の孔雀の形姿である。洵にこの孔雀その孔雀たることを疑はしめる迄に實際に遠い。由來支那に於ける孔雀の傳來は周代に初まると云ひ歷史教育第十ノ二秋山謙藏氏「孔雀傳來考」參照。また古來の鳳凰にすら源をこの鳥に求め得るとは史家の云ふ所である東洋學報第十九ノ一出石誠彦氏「鳳凰の由來について」參照。その甚だ寫實的な姿は早く漢代の諸動物文中に現はれると共に、孔雀に意を得た畫人の名は六朝に溯る。云ふまでもなく唐代の豪華は愈

（帝室博物館圖錄ヨリ）

この鳥に親しんで愈その麗姿を欣んだ。之を繪畫に限つても機織、器財の文様は固より、高祖が寶妃を求めんとしてその家の門屏の孔雀畫に射を試みたと云ひ、或は邊鸞が貞元中に新羅國の獻じた孔雀の舞を解するものを玄武殿に寫してその眞容の宛として繁節に應ずるの態があつたと云ふのを聞く。かゝる當代の孔雀は、他の佛像の中に、例へば五部心觀の甚だ簡單な小圖像の中にも、或は觀智院の五大虛空藏の如き彫像の中にさへも明らかな實際の姿を殘してゐる。而も獨り本圖の孔雀が孔雀と云はんよりもむしろかの西大寺十二天中の梵天の乘御する白鵝に孔雀尾を加へたにも似た異形に描かれたのは抑ゝ何故であらう。若し之を說明せんとすれば恐らくかゝる圖相を傳へた特殊な一傳の形軌があつたと見る外はないのであらう。而して本圖が既にかくの如き假定を必要とするならば、憾むらくは之を一般の畫人の蹟に結び付ける手懸りは自ら失はれて行くのを感ぜざるを得ない。

## 二

兎に角吾々は法隆寺藏品に於て始めて像と軌とを共に徵すべき一本を得る。爾來我國に於て描かれたこの像には固より明らかな傳來があつた。併し今之を考へるに當つてその修法の歷史を更めて省る必要はないであらう。云ふまでもなく孔雀經法は東密の最祕の一で、大師以後聖寶が始めて醍醐に修して以來、東寺長者並に仁和寺宮の外は容易に之を許さず、而も靈驗最も高き法として雨を祈り、御產を祈り、病を祈り、天變を祈り、一切の攘災を祈つた。而して之等の諸記錄のうちには往々にして像例を云ふものはあるが之を隈なく求め出す必要も亦ないであらう。唯茲に澤鈔（卷第三）の

故永嚴法印鳥羽院御時、奉仕一字金輪法時、壇上安置三寸孔雀明王（中瓶奥居之）是金輪與孔雀通用之故也（下略）

と云ふのを擧げてかゝる孔雀經以外の修法にもこの像が用ひられた事のあるのを省るに止めることゝする。

いま今日に殘るこの像の主なるものを擧げれば、畫像に原家、侯爵井上家、東京美術學校、安樂壽院、松尾寺、河野家の諸藏品、並に智積院の一本があり、彫刻には金剛峯寺藏品がある。茲に更めて說くまでもなく、之等はその圖相を殆んど全く一致し、凡て像、孔雀共に正向し、往々にして持物の形、衣裳の文彩等を異にするほかは多くの微細な點まで相通ずるもので、之等が一系の粉本に出たことは疑を容れない。而して之等が凡て名品の名に背かないことはこの明王像に歎稱すべき事ながら、その理由は偏にこの法の重かつた爲に外ならぬのであらう。いま之等の一々を細說する事を避けるが、畫像のうち智積院本を除く六點の製作は最初の原家本を藤原後期に、最後の河野家本を鎌倉後期に置いて略ゝ先揭の順序に在ることは曾て丸尾氏の詳かに論證せられた所である。（國華第三七九「松尾寺の孔雀明王圖に就いて」）金剛峯寺の一像は現存彫像の唯一例であつてしかも膝裏銘に快慶の名を見、この點からも貴重すべき遺品たるを失はない。次いで諸圖像抄

孔雀明王像

京都　醍醐寺藏

本等に載せるものも稀に胎曼中の尊形を見るほかは概ねこの一系に同じたもので、軌形の説また最も之が多い。その一二を云へばかの醍醐寺圖像中の半着色の一幅（寶雲第十五冊仁和隆研氏「醍醐寺國寶粉本孔雀明王像に就いて」參照。）玄證の款ある安田家の藏本（大正大藏、圖像第十二・別紙第十八）等を著しとする。

法隆寺本と原家本以下と、この二つは同じい軌に依りつゝ一は斜向し一は正向する形を採る。而してもと胎藏圖中のこの尊も亦斜向し、且つ早き乘御孔雀の佛像、卽ち先述の五部心觀中の諸金剛、或は胎藏最外院の俱摩羅天等の孔雀が凡て横又は斜向に描かれてゐることからすれば、恐らくこの二種の圖樣の前後は現存の之等の像の前後に同じく、原家本以下に於ける本尊像として普通な正向の形は法隆寺本の斜向の形に次いで出で來つたものと解される。なほ圓載の請來に「孔雀佛母幀子一副」があり、諸圖像抄が多くこの名を擧げるのに徵すれば或はこの本が我が原家本以下の形式に關係を有するものではないかの疑が起る。唯この疑も固より一の疑に過ぎない。

但し我國に傳へた圖像も亦固よりこの一本のみではなかつた。いま永嚴の撰と云ふ十卷抄の記載を見れば

尊像可依本軌但智證大師請來像、本身白黃色若是向東方可脩者兼黃色歟
又宋朝本、四臂之中左右二手各持蓮花云々
又有古像作二臂左持孔雀尾或持吉祥果云々
又或云本軌所說四臂ノ又加二臂幷六臂也
其二手持物可尋見之

と云ふ。卽ち此處では通形のものゝ外に四本が數へられて居り、更に圖像集、白寶口抄其他に從へば新渡の軌に「大孔雀王天祕要法」があつて

一像、右執三五莖孔雀尾、左當心持金輪、身白色住慈悲相乘孔孔雀鳥

又は

畫大孔雀天、有頭上一髻住童子相、右第一手執孔雀尾、左第一手執金輪、右第二手執吉祥菓、左第二手執寶馬頭、身青色、乘青色孔雀王安住寶山

と說くと云ひ、また圖像集は別本「佛母大孔雀明王畫像壇場軌」に

畫本尊大悲像、右手執白蓮花、左手持如意寶珠、乘金色孔雀王、身色如日光

と云ふと述べてゐる。うち嚮の「大孔雀王天祕要法」は傳へて不空譯と云ひ、覺禪抄はなほ之を最朝の持本と云ひつゝ、眞僞可尋の一書としてゐるものであるが、若しこの類の別傳を求めたならば蓋しその數は尠くなく、二臂、四臂、六臂の各〻にそれぞれ身色、持物等を異にする幾例かを得ることゝなるであらう。

なほ玆に加へて云へば之等の外に孔雀經曼荼羅がある。この曼荼羅はかの不空譯の壇場儀軌を忠實に圖繪したもので、曼荼羅集にその二例を示してゐるが、唯この圖は用ひられた事が尠く、著しい遺例を見ない。この事情は祕鈔問答の

問、此法本尊用(孔)雀經曼荼羅耶、答、懸孔雀明王尊像爲本尊、不用孔雀經曼荼羅、故御記云、道場孔(雀)雖觀曼荼羅、修法時只孔雀明王一體懸之云々

と云ふ如きが明らかにしてゐる。

而して玆に大陸の所製に係る一本にして我に傳はり、しかもその軌を甚だ異にした孔雀明王像がある。それは云ふまでもなく仁和寺藏本である。この像は三面にして六臂、蓮上の孔雀に坐して雲中に現ずる姿で、三面の左右は忿怒形にして上に羯磨冠を頂き、二手は

合掌し、右第二手に箭、第三手に戟、左第二手に弓、第三手に獨鈷杵を執る。その異形なる事と手法の巧麗を極める事とから直ちに我國のものでない事を明かにしてゐるが、なほ忿怒面の形、持物、雲形等に永保寺千手像と一味を通じ、南宋頃の作である事を物語つてゐる。而もその孔雀の寫實を得たことは他に比類なく、また孔雀明王像中の一異彩である。

## 三

卒然この像に對するとき、吾々はかの唐及び五代頃の記錄以來殆んど消息を絶つた大陸の孔雀明王像に突如として再會するかに感ずる。然し乍ら事實は必ずしもさうではない。孔雀經の弘通は前述の如くその譯經の多數な事にも徵し得るが、また他の諸經典中に或はこの經、この明王の名を擧げ、或はその修法、明呪を說くものゝ尠くないことは宛も我國の諸儀軌に於けると同樣である事を知るのであつて、例へば善無畏譯阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行儀軌には「大結界法一依孔雀王法」と云ひ、空基譯青色大金剛藥叉辟鬼魔法には「行者常以孔雀明王根本印眞言護持□□除一切鬼神障難」等と云ふ。就中宋代以後の譯經に於ては天息災の一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅經には十六大女形明王のうちに「孔雀大明王」あり、同譯の大方廣菩薩藏文殊師利根本儀軌經にも女身明王としての「孔雀明王」あるなど、女形として出づることが多く、從つてまた法賢の佛說持明藏瑜伽大敎尊那菩薩大明成就儀軌經（造體像分第三）に「次於右邊畫佛母孔雀摩耶於次後面、畫大孔雀明王、次後左右、畫舞孔雀」とあるが如くに曼荼羅中の一圖像として示されることが多い。而して若し之に前記の我國に傳來した諸記錄、就中智證本或は宋朝本等と云ふものを加へて見るならば、この明王像の製作が引續いて彼土に行はれてゐた事は略〻推察するに足るのである。

この事情に徵すれば必ずや大陸に遺存する孔雀明王像も一二に止らないであらうと思ふ。唯私は寡聞にして今之に當るものを僅かにセリインデア第六十三圖及びサウザンドブダス第十七圖の千手曼荼羅中の一尊に知つてゐるに過ぎない。この像は本尊千手像の右下方に、左方の金翅鳥王と相對してやゝ斜に向く姿で、孔雀鳥に乘じ、女形にして三面四臂、右第一手に鳥形、第二手に孔雀尾、左第一手に金剛鈴、第二手に葡萄の如きものを持ち、その下方に「孔雀王」の銘札がある。是亦異形の一尊にして固より依る所を知らず、今は唯之を前記の大孔雀王天祕要法其他の所說と共に別傳の一と見る外はない。しかも私はなほこの尊の女形であることが宋譯諸經の所說に合することゝ、また三面なることが仁和寺本に近いことゝに特に興味を感ずる。而して仁和寺の一本も亦この燉煌の一圖と相似た事情に在ると云ふ外はないのであらう。

この本の傳來に關しては從來未だ說く所を聽かない。唯この孔雀經法の本所をなした仁和寺には古く一本の著名な孔雀明王像があつた。卽ち長秋記天承二年八月二日の條

二日丙寅　晴、申時詣仁和寺、宮御病訪也、今日不發給云々、懸累代孔雀明王、開大師自筆同經

に見るもので、之を裏書するものに祕鈔問答の「仁和寺大師御本尊孔雀明王一體爲累代重寶、御室大法之時必被懸件御本尊云々」等の記事がある。この大師本尊像は如何なるものであつたかを知らぬが、他方祕鈔問答はこの記事と同じ孔雀經法の條中に

問、孔雀明王手臂有異耶　答、今次第四臂也、澤抄井常喜院圖像同之、理性院靑衣紙(表)云、眼授云、範僧正(紀俊僧正(中))被甲、權僧正御房云、孔雀明王法六臂像爲深祕、常四臂加二臂、二臂者、左手持梵篋、右手持月輪是也

私云(中略)於六臂者無指本說只傳歟、尤可爲祕矣

と述べてゐる。卽ち賴瑜は仁和寺の大師本尊を云ひつゝ、現本の像容に關しては此處でも全く觸れる所がない。若し之を以て當時此寺には現在の一本を傳へてゐなかつたとするならば固より早計に失するであらうが、恐らくこの大師本尊像が現本ではないことは之によつて略〻推定して誤ないと思ふ。

この故を以て云ふのではないが、私はこの甚だ軌を異にする仁和寺本に對して祕かに一抹の不安を抱いてゐる。それはこの像が或は孔雀明王像以外の尊たる虞はないかと云ふ事である。この事たるこの像の本軌を尋ねるよりも解き難い問題であらう。併し私をしてこの疑を生ぜしめる所以は實に乘御孔雀の佛像が一にして止らぬ爲である。先述の俱摩羅天、或は五部心觀中の諸金剛を始め、彌陀、文殊等の諸尊の孔雀に乘御することのあるのは我國の軌にも傳へる所で、醍醐寺藏諸文殊圖像卷にはその二例さへ徵せられる。また大陸の俱摩羅天には未傳の軌もあつたらしく、グリューンウェーデル氏のベゼクリク發見の一面六臂の一像 Altbuddhistische Kultstatten in Chinesische Turkistan. S. 281. Kârttikeya 像 などもその例と思はれる。かくて未だ仁和寺の本軌が知られないとすれば、それが此の種の未傳の他像のものでないと云ふ保證も當然未だできないであらう。但し假令之がもと孔雀明王以外の像として描かれたものであつても我國が之をかく傳稱して來たことには固より多くの關りはないと思はれる。

仁和寺本の儀軌に關する問題は姑く此處に止めて、なほ斯本の手法に就いて一言し度い。もと唐代の畫人に多くの製作を見た孔雀明王像が宋代就中南宋に至つて殆んどその記事を傳へなくなるのは、佛畫の一般と途を同じくするもので、その製作が多く專門畫師に委ねられるに至つたことを示してゐる。本圖の技法の特に細巧にして配色にも著しく裝飾畫化の行はれてゐる點はかゝる佛畫師の手に成つたことを證するのであらう。唯かくするとき本圖の製作は愈〻秀拔を賞すべきを感ずると共に、特に孔雀の寫實に愈〻興味を惹かれる。蓋し宋代の花鳥畫は孔雀に於ても著しい發達を遂げたに相違ないが、今日に殘るものは殆んどこの畫像のそれのみに止る。併し假令この仁和寺本がかく佛畫として異數なまでに巧みに之を寫したとは云へ、かの徽宗の園囿に寵を誇つたこの鳥の畫院の精品の悌を玆に見んとするのは當然誤であつて、僅かにその風がかゝる佛畫にも及んだ事實を徵し得るに過ぎぬ。併しこの事實を他方に我國の佛畫の事情に省るときは自ら別個の興味がある。

我國へもこの鳥は早くから傳へられてゐた。のみならず、慧運の請來にもこの鳥があり、王朝の縉紳の邸にこの鳥の卵を產んだ記事も一にして止らない。（既出秋山氏「孔雀傳來考」參照）我國の孔雀文に甚だ自然を得たものあるも故あるを思ふが、而も一たびこの明王の圖形の定められた後は、以後偏に之を亂さん事を虞れて寧ろその眞に遠い事に形軌の重貴すべき所以を認めた感さへある。之は先述の諸本にも自ら明かであるが、近世の畫人の蹟も全くこの範を出でず、例へば、國華一八一號所收の應擧の印ある一圖の如き、雲中の像として描いた點は恐らく仁和寺本風の意匠を藉り來つたと思はれるに拘らず、孔雀に至つてはこの派の寫實の特色は殆んど認むべくもない。いま之をこの宋代佛畫の一作に比較するとき一般の彼我の佛畫の差異の一面を明らかに物語つてゐるのを感ずる。

## 四

以上、幾多の疑問の間を匆々としてこの明王像の推移を辿つて來た。而も私の云はんとする所は早くも此處に盡きやうとするが、唯最後になほ一つを殘してゐる。それは此處に同時に掲げられた智積院の一本である。この一本がかの法隆寺本とは意味を異にしつゝ同じく甚だ異數の佛畫であることも既に通說である。

この像は形軌としては法隆寺以下の諸本と同樣に不空譯壇場儀軌に據り、像形に於ても原家本以下の我國に最も普通な正向の形をとり、且つその細部の圖樣に於てさへ甚だよく普通本と一致してゐる。また進んではそのやゝ硬く强い描線、胡粉地に朱暈を施す風と之に伴ふ輪廓線の强調、濃朱の肉身線等も藤原鎌倉の佛畫に間々見られる所で、之等は正しく我が佛畫の一手法である。併しかくまでに强い身衣の胡粉上に、身には鮮かな朱暈と朱線とを施し、衣には之に反して全く暈を省いて焦墨の褶線を利かせ、且つその文彩をも著しく弱めて對照的な效果を收め、而もこの全體を五彩の孔雀の上に置いた、この單純にして印象的な畫趣は他に殆んど類例がない。のみならず極めて豐滿にして且つ一種の强味ある相貌、または肩幅の廣い軀肢の充實した構へは到底鎌倉後期以後のものに非る古樣を持つに拘らず、描線、賦色、寶瓶の形等には著しい硬さが目立つ。この畫の製作の年代は甚だ決定に迷ふものがある。

更に最も異とすべきものはその文彩である。この文樣の用色は既に異數であるが、その形式も殆んど全く我國の佛畫中に類を絕する。いまその大體を記せば、天衣の緣には三重の龜甲形を連ね、その中に三重圓を中心として放射狀に擴がる一文樣を收め、次いで裳襴と帶緣とには中に十字ある二重圓文を繫いで更に各の外周を連結し、裳裏には細かい襷地に四個の十字圓文を集めたのを散らす。また裳地には一面に雙方より內彎する曲線を單位とする一種の雲文を布いて、なほ腓部に當るあたりに數帶を作り、此處に交互に反曲する一種の流水文と、裳襴に見る圓繫ぎ文と、及び襷（右膝は網）の細かい地文上に一種の幾何學文並に裳裏に見る四個の十字圓文を配したものとを

孔雀明王像（部分）

京都　智積院藏

描いてゐる。凡て之等は通じてやゝ單調にして弱味はあるがなほ一種の細かさと柔か味とを加へて、よくこの特殊な像容に適するのを感ずるが、唯その類例を求めるとき、直ちに甚だしい困難を覺える。中に十字を描いた圓繫文の如き、或は細密な襷文の如き、或は龜甲文も單に龜甲の點のみよりすれば、之等の一々の單位は必ずしも藤代以降に見ないではない。併し就中膝部の一種の雲文、或は腓部の一種の流水文等は果して何れの系統に屬するのであらうか。之を強いて云へば支那上代の諸文に系を引く宋代以降のそれに近い感がある。即ちその氣分は我國のものであるよりも半島大陸のそれで、而も衣裳に施されるよりも寧ろ器財に見ることの多いものであらう。而して若しこの推定が當つてゐるならば、之も亦新輸の外邦品に學んだ一意匠に屬するが、併し固よりこの推定も單なる推定の一に止り、その異は依然として異である。

茲に當然挿み得る疑はこの手法と文様との異數な點は或は後の加筆に因するのではないかと云ふ事であらう。本像にも相當に修補の手は加へられてゐて斷爛を補ふ絹の種類も二三に止らず、之に加へた彩色は延いて舊絹上にも及んでゐるが、併しこの文様の用色は光背の一部及び孔雀の體の輪廓等に用ひられたと同種の暗紫系の色で、之を後の加筆とするときは、その手は當然之等にも及ぶと見なければならぬ。乍然當初は衣裳に何等の文様を描かなかつたとする事もやゝ考へ難く、且つ全く之を改めるまでの全體的の書き起しがこの像に行はれた痕は認め難い。特に本幅の下半は絹の保存甚だ佳良である。依つて思へば時下つた一時に古様に依つたかゝる一異品が製作されたと考へてまた孔雀明王像中の問題の一に數へて置くの外はないのであらう。

なほ因に記せばこの像には左の四枚の裏貼附がある。

第一「孔雀明王　文祿四乙未年卯月於清涼殿御修法大覺寺　空性親王御勤仕之□□御本尊也　灵驗无双而已　智積院玄宥僧正」

第二「于時寛永廿年三月日令修復於此重加開眼供養訖　權僧正元壽」

第三「延寶甲寅正月日改換褙裝重修開眼加持了　權僧正運敞（印二）」

第四「運敞僧正修飾以來凡過一百六年破損莫大也　是以用褙裝加修補祈攘災招福者也　安永八年乙亥十二月廿八日　僧正動潮（印二）」

もと智積院は南北朝の草創に係るが、下つて桃山時代に堯性玄宥に至つて始めて中興した。この第一の裏書によればこの幅は玄宥によつて空性親王の御修法本尊を當院に傳へたのである。次いで寛永の修補は第四代長存元壽、延寶の改裝は當院第七代にして有名な泊如僧正元春運敞、安永の重補は第二十二代通照動潮の手に依つてゐる。而して大覺寺空性親王の文祿四年四月廿一日清涼殿に此の法を修せられた事は宗乘の記す所で、この裏書はまた之を證すべき一資料である。且つ大覺寺は固より東密の名刹にして中頃龜山後宇多兩法皇の入御あつて以來その勢威仁和寺の總法務を沙汰するに至つたと云ふ。茲にこの大法を傳へたのも故あると共に、この像にしてこの傳來あることも洵に名品の名に恥ぢぬ所以であらう。